

淫虐の女幹部セティシア

2013/11/12

Var. 1.05

サークル名：ケチャップ味のマヨネーズ
シナリオ：Cray-DK（クレイバンの人）

登場人物表

■女幹部（セティシア）

地球を侵略せんとする、宇宙帝国ガキノグの女幹部。男性の性欲をひたすらに刺激するような妖艶な顔、いやらしさの極致とでもいうべき肉体、そして裸よりもエロティックなコスチュームを着込んだ女。丁寧な言葉遣いだがその言動は淫乱で邪悪そのもの。外見は二十代半ばだが、実年齢はもう少し上。宇宙に古くから伝えられる大魔術のなかでも、実現不可能とされた秘術を自らの肉体に施しており、不老であり不死。

地球人類のうち数億人は彼女の指揮により虐殺された。性格は冷酷で残忍なだけでなく、淫乱、そしてサディストでもある。捕えてきた年下の男を犯し、墮とし、隷属させたあとに殺すことを至上の悦びとしている。

地球侵略を阻止せんと立ちはだかる銀河刑事のヴォルザーを憎んでいるが、ヴォルザーの外見が彼女の好みであったため、いつか彼の身も心も墮としてからいたぶり殺そうと策を練っている。今回、首尾よくヴォルザーの恋人であるパートナーを捕えたことにより、その淫らで残酷な欲望を満たさんと淫虐の罠にヴォルザーを誘いこむが……

■ヒーロー（ヴォルザー）（音声はありません）

地球出身の銀河刑事。宇宙帝国ガキノグの女幹部セティシアには「坊や」呼ばわりだが、二十代前半のれっきとした成人男子。パートナーであるヒロイン、アライとは両思いだが、最近やつと恋人関係になったばかりでキスさえしたことがなく、手をつないだ程度。

宇宙犯罪者に両親を殺されたことをきっかけとして銀河刑事になるべく、ひたすら訓練の日々を送っていたため、アライはヴォルザーがはじめて付き合った女性。そのため、童貞であり性的な経験は皆無。もちろん性的な欲求は普通男子と同じようにあり、一週間に1、2回のオナニーで性欲を満たしている。

地球侵略を企む帝国とは1年近く死闘を繰り返しており、セティシアとの邂逅は数ヶ月前。地球人口を半分にした帝国、そのなかでも数億人もの命をその指揮により奪ったセティシアを激しく憎んでいる。しかし、女幹部の異常なまでのセックスアピールに密かに欲情したことがあり、己の意志の弱さ、女性に対する耐性のなさを嘆いている。

今回、パートナーがセティシアに捕えられたことを知り、彼女のいるアジトに潜入するが……

■ヒロイン（アリイ）（音声はありません）

ヴォルザーと同じく地球出身の銀河刑事。華奢な身体に可愛い顔立ちの持ち主、れっきとした女性であるが胸はほとんどない。

数ヶ月前、ガキノーグの女幹部セティシアの戯れともいえる公開処刑で両親と弟を殺される。茫然自失の状態だったヒロインを献身的に介抱したヴォルザーと付き合うようになるが、お互いはじめての恋人であったため、手をつなぐ程度にしか進展せず。

パトロール中に不意をつかれ帝国に捕えられ、セティシアによってヴォルザーを誘き出すための人質となる……

「ねえ、両親を殺され、弟を殺された挙げ句、わたくしたちの帝国に逆らう貴方の恋人、銀河刑事ヴォルザーの手かせ足かせとなるために人質になる……この状況、どんなお気持ちですか」

「ああ、ちゃんと言葉にしてみらわないとわかりませんわ。フフ、ぺちやくちやと口うるさいので猿轡をさせたのはわたくしですけど……でもまあ……わたくしを睨みつけるその表情をみただけで大体は察せますが……」

「でもね、悪いのは貴方の恋人である坊や……ヴォルザーですよ。わたくしたちの崇高なる地球侵略を何度も何度も邪魔をして……」

「何ですか……何かいいかげですわねえ。貴方のような地球人を、ともに宇宙にも進出できない原始人どもを支配しようと考えて何が悪いというのですか？素直にわたくしたちに降伏さえしていれば……地球の人口が半分になどならずに済みましたのに……」

「あらあら悔し涙というのですか……そうでしょう、そうでしょう、悔しいでしょうねえ。でも、わたくしたちに逆らうから悪いのです。ん、この部屋に……何か気になるものでもありましたか？」

「ああ、壁の盛り上がりですね。何に見えます？やっぱり……人ですか」

「フフ、はい、正解です。そのまさかですわ。この部屋には……うーん二十数人でしゅうか、わたくし達に逆らった地球人、そのなかでもわたくしの好みだった男たちを快樂と絶望でさんざんに墮としたあと、生きながらにして塗り固めましたの」

「とても苦しそうな、生きたい、死にたくないと渴望するようなかたちで固まっているでしょう。素敵な芸術作品だとは思いませんか」

「あら、御理解いただけない様子ですわね。この芸術性を理解いただけるなら、生かしてあげようとも思いましたのに」

「どちらかといえば、理解する方ではなく、芸術そのもの、つまり壁に塗り固められた彼らのお仲間に加えて欲しいという意思表示と受け取って構わないでしょうか」

「フフ、想像して怖くなっちゃいましたか。ですよねえ、息もできないまま、身体がだんだん固まって行く恐怖……タマリませんよねえ」

「でも、まあ、それはヴォルザーが来てからにしましょう。フフ、もう少しで彼が来ますわ……貴方の愛する坊やにもう少しで逢えますよ、嬉しいですか」

「……複雑そうな表情ですわね。嬉しいけれど……自分が人質になっていることで彼に迷惑はかけたくない……といったところでしょうか」

「そうでしょうねえ、貴方のせいでヴォルザーは死ぬことになるんですから」

「ああっ、その表情、いいですわ。たとえ話せなくても、その顔を見るだけでゾクゾクしちゃいます。ふふ、もつともつと素敵なお顔になるよう精一杯頑張らせていただきますね」

「フフ、何か騒がしくなってきましたね。そろそろ坊やが到着といったところでしょうか」

「遅かったですね、坊やの恋人がずいぶんとお待ちかねですよ」

「さあ、つて……んんっ……わたくしの胸に穴？……イツ、イヤ、キヤアアアアアアアッ」

「い、……いきなり、レーザーガンで不意打ちなんて……そんな……これじゃあ人質の意味が……ああっ……グハアッ……」

「………と倒されれば、めでたしめでたしといったところなんでしょうが……ヴォルザー、何度もわたくしと戦った貴方なら……そう簡単にいかないのはおわかりですよ」

「そう、わたくしは貴方も知つてのとおり不死身……でも……少なからず痛みはありますのよ。敵対しているとはいえ、女に手をあげるなんて……ホント坊やは非道い人ですわね」

「そんなおイタをする坊やには遠慮はいりませんわね。坊やの大切な恋人を……殺しても構わないという意志表示と理解してよろしいかしら」

「なら、そんなバカな真似はおやめなさいな。わたくしも……そんなに甘くはありませんわよ」

「フフ、すごいですわ、そんなに……わたくしが憎いのですか。ああ、その敵意がむきだしの表情、タマリません。そんな顔をされるとわたくし………ンンッ」

「ンンッ……ハアン……わかりますか……ンンッ……乳首が布ごしにも勃っているのが……坊やが興奮させるからですよ。貴方に睨まれながら……胸をいじると、タマらなくなってしまう」

「フフ、痴女ですって？否定はいたしませんわ、坊やも気持ちいいこと、好きですよ？こんな状況……興奮しない方がオカシイと思いませんか？」

「ウフフ、まあ、そう焦らないでくださいな。はぐらかしているわけではありません、もちろん答えは『いいえ』です。解放なんてするはずがありません。大切な人質ですもの。人質がいなければ……さきほどの不意打ちの一発でおさまらなかつたでしょう？そうですわねえ、今頃、わたくしをレーザーブレードで八つ裂きになっているんじゃないでしょうか。まあ、もちろん不死身のわたくしに対して意味などありませんけど」

「そんなことより……気になる言い方ですわね。ええ、そうです、安心してくださいな。ご覧のとおり、下着姿にただけで、まだ何もしていません。それにしてもブラの意味がないほど薄い胸に、ガリガリの身体……こんなので坊やは興奮しますの？」

「可愛いですわねえ、そう、その反応をみると下着姿を見るのはじめてなのかしら。ウブな関係でしたのね」

「いえいえ、関係ありますわ。今から貴方と貴方の恋人をどうしようか迷っていたところですよ。清い関係だと聞いて、とても愉しいことを思いました」

「フフ、秘密です。今からのお楽しみですよ」

「そう、ムキになつて怒らないでくださいな。ちよつとしたおふざけです」

「別に坊やに許されようなんて思っていないません。原始人相手のちよつとした戯れですわ。さて、どういたします？坊やの選択肢、多くはありませんわよ」

「一つは大人しくわたくしに捕まること、そうすれば恋人の命だけはわたくしの名誉にかけて保証いたします。もう一つは恋人が人質にとられていることを気にせず、わたくしと戦うこと。負ける気は毛頭ありませんが……ひよっとしたらわたくしを殺しきることができるかもしれません。でも……決着がつく頃には恋人はこの世にはいないでしょうね」

「さあ、選んでくださいな。もし抵抗せず大人しくするというなら……その物騒なレーザーブレードを捨てて下さい……そうですわねえ……1分ほど待ってさしあげます」

「よく考えてくださいね。短いですが恋人と相談なさいな。といった矢先から……フフ、『私のことはいいから戦って』といった表情ですわねえ。そして坊やは……葛藤中といったところですか。ホラホラあと30秒以内に答えを出して下さいね」

「残り15秒……つと、フフ、考えすぎて足元がお留守ですわよ」

「フフ、オホホホホ、なんて素直なんでしょう。1分間、わたくしが何もしないと本当に信じこんでいたのですね」

「卑怯？れっきとした策ですわ。考え込んでいる間に床に仕掛けてあったトラップを発動させ、坊やを捕える。まんまと引っ掛かりましたわね」

「さて、坊やはどちらも選ばなかったわけですから……貴方も貴方の恋人も……のちほど死んでいただきます」

「フフ、そんな悔しそうな顔をしてても手も足も出せなければ怖くありませんわ」

「いやです、貴方の恋人には絶望を味わってもらってから死んでもらいます。これまで散々、坊やたちには作戦を邪魔されてきましたからね。簡単に死ねると思ったら大間違いです」

「さて、と。では愉しいことをいたしましょうか。その前に坊や……坊やは彼女のごが好きですか？」

「ああ、相思相愛ですね。とてもとても愛らしいです。それは……すぐく堕としがいがあります。頑張りませんかね」

「『何を』ですって、当たり前のことを聞きますのね。わかりませんか？坊やを裸にただけですわ。それにしても結構大きなオチンチンをお持ちですのね。萎えていてもこれくらいあるなんて」

「ああ、これから何をするつもりか、ということですか。それは、簡単、こうするんです」

「どうです？わたくしの顔が、わたくしの大きな胸が触れあうか触れあわないかの距離で、手でコかれるというのは」

「フフ、たわいもないイタズラですわ」

「突然ですが、坊やはわたくしのことが好きですか？」

「あらあら、『死ね』なんてひどいことをおっしゃいますのね。そんな女に手でオチンチンを弄られるのはどうですか」

「『気持ちが悪い』……ですか、でも坊やのオチンチンはだんだん硬く、大きくなってきていますわよ、ねえアリイだったかしら、貴方もそうは思いませんか？」

「ああ、ああっ、タマリません。その泣きそうな表情、いいですわ、言葉が紡げなくともその表情を見るだけで興奮いたします」

「そうです。今から貴方がキスしたことも、ましてセックスなんて想像くらいしかしたことがないであろう、貴方の大切な、とっても大切な恋人を犯してさしあげます」

「ふざけてなんかいませんわ。それとも好きでもない男女が抱き合うなんてオカシなこととのたまうつもりですか」

「フフ、坊やが堪えればいいだけですわ。もし逆であれば……男が女を犯す場合は堪えようがどうしようもありませんが……この状況ならば坊やが反応しなければいいのです。オチンチンが萎えたままなら、どうしようもありませんもの」

「普通であれば……敵対する、しかも坊やや貴方と同じ地球人を虐殺し尽くしたわたくしがいくら触ったところで反応するわけありませんわよねえ」

「うんうん、その意気ですわ。頑張ってくださいましね。ご褒美に……チュパアツ……ンン……ンアアツアアア……ハアア……」（無理矢理キスをする）

「どうですか、まさかファーストキスとかじゃ……ウフフ、アハハハッハ、最高です。最高ですわ。キスもはじめてなんて、いつも戦闘員や怪人を無慈悲に切り裂いていく坊やとは思えませんわ。こんなにウブだったなんて」

「そして、フフフ。ご覧になってくださいな。ホラ、もう振り返るくらいに坊やのオチンチンが勃起しています」

「坊や……本当は彼女ではなく、わたくしのことが好きだったとか。もしそうなら正直に言ってくださって構いませんわよ」

「フフ、ですわよねえ。『実は……』なんて言われたら、それこそ萎えてしまいます」
「さて、前置きが長くなりましたが、まずは一回イカせてさしあげます。彼女にもたっぷりイくところをお見せなさいな」

「けれど……本当に大きいですわねえ。こんなので貫かれたら……想像するだけでタマリません……」

「フフ、『やめろ』とはいいますが……オチンチンは全然嫌がっていませんわよ」

(フエラをする)

がしますわ……」

「ああ、もう止まりません。ンググ……ンニン……ンハツアア……チュパチュパ……」

「あらあら涙を瞳にいっぱいにためて、どんな心境なんでしょうか。大好きな坊やをとられて悔しい……ですか？それともこんな痴女にイタズラされてイキそうになっている坊やが憎いのですか……どちらにしてもタマリませんわねえ」

「ンンッ……ハアアアン……思わず手が股間にのびちゃいました……我慢ができませんってこういうことをいうのですね。坊や、安心してくださいね。わたくし、器用ですので、ちゃんと……坊やのも弄りながらですからね」

「シアアア……ハアン……ああ、坊や、坊や……最高です……坊やもイッてくださつて構いませんのよ……シン……ハアン……」

「ああ、ビクビクって……さあ、我慢することは……ハアン……ありませんわ、わたくしに……かけて、シン……いっぱいかけてくださいな……」

「フフ、気持ちいいでしょ……もつと……シン……もつと速めますわよ……」

「さあ、イキなさい……」

「ああ、坊やの濃厚なのがわたくしに……すごく溜めてらしたのね。こんなにドロリと
 して……アリイ、見ていますか、貴方の大好きな坊やがわたくしの手コキでイッ
 てしまったのを」

「フフ、眼をつぶつても現実には変わりませんわ。坊やが射精してしまったことを認めなさいな」

「ヴォルザー、どうでしたか。気持ち……よかったですか」

「嘆くふりなんておやめなさい、気持ちよかったでしょう。もっと嬉しい顔をなさいな」

「最愛の彼女に見られながら……憎い敵の女にイカされるなんて、そりや無様ですわよね。お気持ちお察ししますわ……フフ、アハハハハハハハハハハ」

「さて、次は、どうしましょうか。何かご希望はありますか？」

「あらあら、そうきましたか。そうですね。確かに触って刺激を与えれば、どんなに憎い相手でも勃起してしまう、射精してしまう……なんてことあるかもしれませんわね」

「言い訳としては苦しいですが、まあ、そういうことにしてあげても構いません」

「それでは、触れずにあなたのオチンチンが勃ってしまつたら……言い訳はできませんわよね」

「フフ、言い切りましたね。アリイ、貴方も聞きましたね。『触られなければ、お前みたいな邪悪な外道女に勃つはずがない』という坊やの言葉を」

「では、試してみしよう、わたくし、さっきは少しもイけませんでしたから……ちようどいいですわ」

「え、どうするつもりかですって？もちろん……ンン……ハアアン……こう……ンン……するのですわ」

「フフ、わたくしのオナニー、よく……見てくださいな……ハアアッ……」

「ああっ……坊やに見られていると……興奮しますわね……ンンッ……」

「ホラッ、わかりますか？乳首が……ンン……勃起しちゃいました……ああっ……イイです、イイですわあ……わたくし、胸を揉むの大好きですの……」

「こんなに大きくても……ンハアア……感度は……良好……なんです……」

「ダメですよ、眼はそらさないでくださいな。眼をそらせば……ヴォルザー……貴方の負けです……わたくしの機嫌を損ねない方がいいですわ。わたくしの気分次第で貴方の恋人であるアリイを先に殺すこともあり得るのですから」

「フフ、そうです。わたくしを、わたくしだけをジックリと見つめてください。ああっ、でも、そんなに睨みつけられると……かえって興奮しちゃいますわ」

「ハアア……ンン……イイ、イイですわ……もつと、もつとおお……わたくしをみてえっ……ンン……気持ち……イイです……」

「ホラッ……聞こえますか、クチュクチュって……どんどん濡れてきています……坊やがわたくしを見るから……こんなに蜜が……ンン……溢れて……」

「あらっ……フフ、坊や……坊やのオチンチンが硬くなってきましたわよ、大きくなってきましたよ……おかしいですわねえ、触らなければ勃たないんじゃないの？」

「まあ、まだ半勃ちですもんね、見逃してあげます。さあ、もつとわたくしのオナニーを堪能してくださいな……」

「ンンッ……わたくしのオッパイ、ハアンッ……すごいと……ンンッ、思いませんか……こんなに大きくて……柔らかくて……フフ、坊やが童貞みたいですし、こんなに間近で見るのは初めてでしょう？」

「ホラ、フニユッフニユッて……坊やが望みさえすれば……揉んでも……よければこのオッパイで挟んでさしあげてもいいんですよ……」

「フフ、ですよねえ。恋人の前ですごいとか……フフ、オッパイを揉みたいとか口が裂けても言えせんわよね。心の底ではどんなに揉みたいと思っけていても……」

「でも……フフフ、想像しちゃいましたか……また坊やのオチンチンが大きくったみたい。アリイからも見えますわよねえ、だんだんビクビクって震えながら大きくなっていく、愛しい恋人のオチンチンが」

「フフ、そんな悲しい顔をしなくてもいいんですよ。当たり前のことですから、わたくしの美貌とこの肉体をみて平然としていられる方がおかしいのです」

「今、坊やとは話していませんわよ。でも……『年増のババア』とは……面白いことをおっしゃいますわねえ。わたくしの外見は地球人でいけばせいぜい二十代半ば、坊やとそう変わらないと理解していましたが」

「坊やは……ひよつとしたらロリコンというヤツですか？まあ、アリイのような、発育のよろしくない女性が恋人なんですものね。でも、それでは貴方は『年増のババア』の手コキでイッてしまい……今、またカチコチに勃起しようとしていますの？」

「……フフフ、あらあら、ここで反論しないと……恋人の顔がまた曇りますわよ。口ではそういつても……そこまでオチンチンが反応してしまうと……説得力に欠けるといふものですわ」

「話はこれくらいにして……ンン……オナニーを……つづけますわよ……」

「ンン……ハアアツ……ンン……ンン……アン……ンン……」

「ンン……ンンアアアツア……ンン……ンアアアツ……」

「ハウンツ……ンン……いいっ……いいのおっ……ハアアアアン」

「も、もう、ダメです……立って、立っていられません」

「坊や……ンン……ンアア……坊やあああつ……もつと、もつとわたくしをみて……ハッアアアン……イイの、イイのおおお……ンン、ハアッアアアアア……」

「坊や、坊やあああ……イイツ、イツちやう……坊や……タマリません……すごいすごいっ……イイク、イツちやう……ああっ……坊や、わたくしイきます。イツちやいます……ハアッアアアアアアアアアアアアアアアアツ」

「ああ、膝がガクガクって震えています……こんな久しぶりですわ……すごく興奮して、ああ、ホント、タマリません」

「もう、ガチガチですわね。先ほど何て言いましたっけ。もう一度言っていただけですか」

「ダンマリですか、黙っていても状況は変わりませんよ」

「では、教えてさしあげますね。『触られなければ、お前みたいな邪悪な外道女に勃つはずがない』です。坊や、嘘はいけませんわ。ホラ、アリエが泣いていますよ」

「何が『違う』ですか、明らかにわたくしのオナニーを見て興奮していたではありませんか。このオチンチンが何よりの証拠ですわ」

「フフ、触られただけでビクビクして可愛いですわねえ。さあ、言い訳はありますか」

「……ないみたいですわね。フフフ、アリエもこれでよくわかりましたわよね。坊やがわたくしの魅力に屈したということが」

「フフ、タマリませんわね。この墮としていく快感というのは……ああ、では次はどういたしましょう。ねえヴオルザー、この勃起したオチンチンをどうやって鎮めて欲しいのかリクエストがあります？」

「どうして欲しいかと聞いているのです。アリエに謝ってばかりで答えになっていませんわ。それに、謝れば彼女が許してくれると思うのですか？ああ、可哀想に、アリエの表情がなくなってきましたわ。よっぽど坊やに失望したんですねえ」

「フフ、アハハハハ、とてもおかしいことをおっしゃいますのね。『もう、この女ではイカないからもう一度だけ信じてくれ』ですって、ホント情けない男ですわねえ」

「でも……イイですわ、イイですわよ。その調子です。そういうお馬鹿なセリフがもっと、絶望を深めるのですから」

「そうですわねえ……フフ、坊やの恋人では絶対にできない方法でイカせてさしあげますわ」

「フフ、想像の通りですわ、わたくしのこの大きなオッパイで絶頂を迎えていただきます。でも、絶対にできない方法と言われただけで、パイズリを想像するなんて……彼女に失礼だとは思いませんか？」

「あらあら、つまり坊やは貧乳好きだと……では、わたくしのこのように大きな胸はただの脂肪のかたまりに過ぎませんわね。こんなので挟まれても気持ち悪いだけでしょうねえ」

「ではでは、試してみましょう。でも、その前に……ローションを使わせていただきますね」

「フフ、アハハハ、いいえ、これは純然たるただのローションです。だから催淫薬なんでももちろん入っていません。フフ、挟む前からイッてしまった時の言い訳を考えていますの？本当に情けない坊やですわねえ」

「ほら……こおんなにテカテカとしてきました。どうです、濡れ光るわたくしの胸は……」

「もう、強がっちゃって……まあ、そういう坊やも可愛いのですけど……」

「フフ、この胸の谷間……すごいでしょう？ 坊やのがいくら大きいといっても、挟んでしまつたらカリが出るかどうかというところでしょうか」

「では……どちらからわたくしの谷間に入れたいですか、正面から？ それとも下からが……」

「……そんなにオッパイを見つめながら迷わないでくださいまし。恥ずかしいですわ」
「黙っていてはわかりません……もう、じれったいですわね。では、こちらで決めますよ」

「そうですねえ、最初は正面からわたくしを貫くように挿れていただきましょうか……」

「では、いきますよ。ンンッ……よいしょと……フフ、すっぱり隠れちゃいましたね。さあ、動きますよ」

「ンンッ……どう……ですか……気持ち……いい……ですか？ 柔らかいだけじゃなく……けっこうな締めつけでしょう？」

「フフ、声が漏れていますわよ……思った以上に……快感でしたか？」

「『やめろ、やめろ』って……そんなに気持ちよさそうなのに、やめて欲しいのですか？」

「ああ、そうですね。イっちゃつたら……恋人との約束を破っちゃうことになりますものねえ。でも……拒否いたします。フフ、もつと激しく動きますわよ」

「ああ、もう喘ぎが抑えられないくらいに気持ちいいですか、もつと……もつと喘いでいただいて構いませんのよ」

「アリイ、どうですか？……貴方の恋人が気持ちよさそうな顔で、わたくしのオッパイにオチンチンを挟まれて喘いでいるというのは」

「フフ、いいお顔。ああつ、もつと睨みつけてくださいまし、でもその視線、わたくしだけに向いているようにには思えませんけど……坊やは彼女のあんな表情みたことあります？」

「『大丈夫、信じてくれ』……坊や……そういう言葉は……もし偽りになってしまった時、より絶望や憎しみを増幅させますのよ……ご存じでしたか」

「そんなに気持ちよさそうなのに……やせ我慢というものです。フフ、本当に可愛いさあ、今度は下から挿れさせてあげますわね」

「フフ、オチンチン、すぐくガチガチ。それに……ビクビクしてますわよ……ひよつとしたら軽くイッちやつたんじゃありませんの」

「まあ、そういうことにしてあげますわ。では、下から……ンンッ……あら、カリだけちよつと顔を出しましたね……さすが坊やのオチンチンですね、わたくしの爆乳に挟まれて、埋もれないなんて」

「では……ンン、また動きますわね……よかつたら坊やも腰を動かして、よりいっそう快感を求めているだけでも構いませんのよ」

「どうですか……正面からとはまたちよつと違いますでしよ……ああつ、眼はつぶらないで……どうかわたくしを見ていてくださいな」

「フフ、タマラナイといった表情ですわね。パイズリ……気持ちいいでしょう？ さつきもいいましたが、坊やの恋人には到底できません。あんなに平べったいお乳、揉むのも一苦労でしょうねえ」

「あら、やはり彼女を悪く言われるのは気に入りませんか……でも事実でしょう。それに……貧乳の方が好きとかおっしゃっていましたが……嘘ですよ。一度、本当に口リコンの方を相手にしたことがあります、今回のようなわたくしのオッパイを使った責めには本当に無反応でしたから。坊やは……決してそうじゃありませんもの。面白いほどに喘ぎますし……さつきから小刻みに動いて、快感を貪ろうとしているのもちゃんと気付いておりますのよ」

「そういえば、坊やとはじめて対峙した数ヶ月前から……ずっと視線はわたくしの顔と胸を行き来していましたわね。正直になつてくださっているのですよ……『年上のお姉さん』が『大きなオッパイ』が、お好きなんですよ」

「まあ、認めるわけにはいきませんわね。では、そろそろ……せっかく、オチンチンの顔が飛び出していることですし……レロ……クチュツ……レロレロ……」

「ああ、のけぞるくらい気持ちよかったですか。では、もっと……レロレロ……シグ……レロレロ……シグ……」

「フフ、いい反応ですわ。わたくしのパイズリフェラ……タマらないといった表情ですねえ」

「その可愛い反応、タマリません。つづけてさしあげますわね」

「シグ……レロレロレロ……シグ……シグ……シグ……シグ……シグ……シグ……シグ……シグ……シグ……」

「シグ、ピチャピチャ……シグ……レロレロ……シグ……」

「ああ、わたくしの乳穴のなかで坊やのオチンチンが蠢いています……フフ、すごい」

「わたくしの胸、すごく……いいものでしょう……もつと、もつと味わってくださいな」

「フフ、さつきから少しずつ……激しく大きく動かしていますの……タマリませんか」

「すごいお顔……そんなに気持ちいいですか……眼がトロツトとなつて、坊や、本当に可愛いですわ。オチンチンもビクついてますし、そろそろ、イキそうといったところでですかねえ……では、パイズリはこれくらいでやめることにいたしましょう」

「あら、何故って……それはまた不思議なことをおっしゃいますのね。坊やのためですわ。このままイってしまったら恋人に申し訳が立たないでしょう。だから親切にもギリギリでやめて差し上げたのです。感謝してくださいな」

「さて、次は……え……聞こえませんか……今、なんておっしゃったの？」

「聞き違いかと思いましたが……フフ、『イかせてくれ』なんて……アリアに弁解できませんわよ、それでもよろしくて」

「……ああ、迷ってくださいな。わたくしのオッパイは逃げませんわよ……ひとつ冷静になつてみてくださいな……」

「ああ、そんな切なげに、物欲しそうにわたくしを見つめるなんて……濡れてしまいます」

「……ああ、そんな風にいわれると……いいのです、いいのですよ。わたくしを求めるといふのはとても自然なこと……それに、そこまでお願ひされたら……わたくしに拒否などできません」

「シグ……それでは……激しく……してあげますわね……」

「ああ……とても気持ちよさそうですね……わたくしの谷間、とても気に入っていただけたようで何よりですわ……」

「……ンンッ……ハアン……少し、少しですけれど……パイズリも自ら乳房を揉みこんでいるような……ンンッ……ものですから……感じてしまいますの」

「ああ、胸のなかでこんなに硬くなつて……オチンチンがビクビクつて……」

「レロレロ……ンン……ンググッ……レロレロ……ピチャッ……チュパアッ……ンンアッア……ハアアンッ……ンン……レロレロ……」

「どう……ですか……今までで一番激しいでしょう……。坊やもつと腰を振つて刺激をお求めなさいな。ンンッ……ハアハアッ……わたくしも興奮して……坊や、わたくしの乳首がまた勃ちはじめているのが……わかりますか……」

「はやくつて……フフ、もう……さっきからイク寸前でしたのね……いいですわ……もう我慢しないでいいのです。そのまま、わたくしの顔に……かけてくださいな……」

「ンンッ……2回目なのに……フフ、熱くて濃いですねえ。どうですか……顔にかけて……坊やの白濁の液でわたくしを汚して、どんなお気持ちですか……」

「……ダンマリですか……射精して少し落ち着いて……自分の言動に深く後悔している、といったところでしょうか……さっきから恋人に視線を一度も送らないのもそういうことなのでしょう。彼女がどんな絶望的な表情をしているか解説してさしあげてもいいのですけれど……あまりに坊やが可愛いので、やめておきますわ。フフ、それに、まだこれだけでは終わりになんていたしません」

「それで……あらためて聞きますけれど、気持ち……よかったですか？」

「フフ、聞くまでもないですわね、なんせ最後には『イかせてくれ』ってお願いされたんですから」

「『もう、この女ではイカないからもう一度だけ信じてくれ』でしたか。滑稽とはこういうことをいうのですねえ……さっきから坊やは彼女の顔を見ないようにしていますが、フフフ、合わせる顔がないでしょう」

「大丈夫ですよ……彼女にフラれても素直にしていたらわたくしが可愛がつてあげますから……」

「あらあら、ご存じでしたの……そうですわ……可愛ければ可愛いほど……虐めて殺したくなる、これもまた真理だと思いませんか？」

「狂っているですか、フフフ、随分なおっしやりようですわね。わたくしはわたくしの欲望のままに素直に生きているだけです」

「さて、そろそろわたくしも気持ちよくなりたいと思いますの。坊やばかり何度もイクなんて不公平ですもの」

「2回くらい射精しただけで勃たないってことはありませんよねえ……」

「無言……ですか。まあ、さきほどのような口約束なんて、坊やはすぐに反故にしてみますものね。下手なことは言わない、というのでもいいかもしれません」

「それにしても……さっきから……わたくしの顔ではなくずっと胸ばかり見ていますけど……そんなにさっきのパイズリが気持ちよかったですか」

「何も言わないのは肯定と受け取りますわよ……大きなオッパイが本当にお好きなんですわえ」

「いいですわ、坊やが少しずつ素直になっているご褒美です。生のオッパイ、見せてあげますわねっ……ンンッ」

「どう……ですか……大きいでしょう？ けっこう締め上げていましたからね、解放すれば、こんなに大きいんです。どうですか、形もいいでしょう？ さっきから布ごしに透けていた乳首なんて、ホラ、こんなに綺麗なピンク色です」

「フフ、生唾を飲む音が聞こえましたわよ……それに……わずかですが萎えてしまった坊やのオチンチンが大きくなってきたみたい……もう認めなさいな、大きなオッパイが、わたくしの胸が大好きだということを」

「しょうがない坊やですわねえ、ではちよつと味見してみますか……」

「フフ、すっぱりと坊やの頭がわたくしの胸におさまっちゃいました。どうですか柔らかいですか……フフ、安心してください。窒息する前に解放してあげますから」

「ふふ、挟んだままフニユフニユと押しつけられると……すごく、気持ちいいでしょうあ……我慢しなくていいのですよ」

「アアアアンッ……そんな囁んじやイヤですわ……ホラこんなに赤く……でもすぐに消えちゃいます……坊やは学習しませんわねえ、わたくしはどんな傷もすぐに癒えてしまうのですよ……まあ、『精一杯の抵抗』を見せておかないと彼女に申し訳が立ちませんものね」

「フフ、みるみるうちに坊やのオチンチンが大きくなってきましたわ……半勃ちといったところでしょうか……」

「それでは、ちよつと待っててくださいいな。さきほどのローションを……ンンッ……お尻に……これで、イイですわ」

「あとは坊やのオチンチンに……そうだ手がいいですか、それとも胸で塗りつけてあげましょうか」

「フフ……坊やの視線は正直ですわね。わかりましたわ、胸ですわ。ンンッ……ほおら、挟んであげますよ」

「どうですか……さっきとは違う感触でしょう？ 締めつけ感はないかもしれませんが……柔らかさは……そして……ンンッ……ハッアアアッ……オッパイがフニユフニユと……ンンッ……形を変えるのが十分に眼で愉しめますよ」

13

ア

ティシ

全部セ

の女

「ハアハアッ……ハアハアッ……フフフ、坊やから腰を振って突き上げるなんて思
いもありませんでしたわ……私の……ハアハアッ……お尻は……気持ち……よかった
ですか？」

「『ああ……』今、『ああ』とおっしゃったのですか」

「フ、フフフ、ついに、ついにお認めになりましたのね。わたくしの肉体に、お尻に屈
した自分を……ああ、正直なのはいいことです。最高でしたか？」

「フフ、そうですか。フフ、もう自分を偽ることができないということでしょうか。何
せ、恋人の前でお認めになるんですものねえ」

「ああっ、とても、とても気分がいいですわ。坊や、坊やはわたくしが、わたくしの身
体がタマらないと……そうおっしゃるのですね」

「フフ、アハハハハハハ……アリイ、聞きました、貴方の大好きな坊やは、わたくし
の身体が好きだと、3回もイッたのに、それでももっとと求めてくるのです……あ
あっ、タマリませんわね。どんな心境ですか」

「ああっ……その表情、見ただけでイッてしまいそう……貴方の絶望の顔をみながら胸
を揉みしだきたくります……」

「えっ、聞き違いでしょうか……坊や、今何と？」

「揉みたいと……わたくしのオッパイを揉みたいというのですか？」

「フフ、フフフフ、堕ちる時は一瞬ですねえ……ええ、ええ、わかりますわ。やっぱり
最初から気になって仕方なかったのでしょうか？いつも胸ばかり見ていましたもんねえ
……やっぱり大きなオッパイが、爆乳が好きなのでしょう」

「あらあら……もう……坊やの、その堕ち方……股間が濡れちゃいます。そうですか……
……そんなに……気になっていましたの。強がっていらつしやったのね。本当に可愛い
ですわ」

「ええ、ええ……わかりました、わかりましたわ。でも……その前に……そうですわね
え……『あんな揉めるかどうかともわからない勃ちもしないブスの貧乳女より、美しい
貴方の胸を揉ませてください、どうかよろしくお願いいたします』、そう言っていた
だければ……坊やの望み、叶えてさしあげますわ」

「……あら、やはり迷いますか。恋人を貶めることなんてできませんか。それなら……
それまでのお話ですが……」

「ああ、恋人の希望と絶望が混じり合った表情、タマリませんわね。フフ、さあ、坊や
……どういたします？」

「聞こえませんわ……もっと大きな声で、恋人にも聞こえる声でお願いいたします」

「フフ、アハハハハハハハハハ……最高、最高ですわ……タマリません。もう……
身体が疼いてどうにかなくなってしまいそう……本当に言ってしまったね」

「あら、わたくしが約束を守るとお思になって？と、もっとイジめたくなるところで
すが……いいですわ、坊やの銀河刑事と思えぬ、性欲に屈したクズぶりに免じて、わ
たくしの胸、揉ませてさしあげます」

「さあ、手の拘束は解きましたわ……揉みやすいように少し前かがみになりますわね」

「フフ、すごい迫力でしよう……坊やの好きにさせていただいて構いませんのよ」

「ンンッ……ハアアアン……タマ……りませんわ。坊やが……わたくしの胸をこんな愛おしそうに揉むなんて……どうですか……大きいでしょう……ンンッ……坊やのわたくしよりもひとまわりも大きな手でも……ハアアン……おさまりきれないんですもの……」

「もつと……食べるように……揉んでいただいて……ンアッアアアアッ……いいですわ……年下の男に……揉まれるのって……大好きですの」

「柔らかいでしょう……ンン……ヒヤアッアアアン……乳首弱いのおおっ……ああ、そんな摘まない……ンヒイヒイ」

「ああっ……坊や、さっきまで童貞でしたのに……うまいですね。ねえ……坊や……坊やの口で、わたくしの乳首……舐めて、吸って……転がしてくださいませんか？」

「フフ、いい返事ですわ。さあ、坊や……オッパイですよお、チューチュー吸ってくださいな」

「ハアッアン……ああ、イ、イヒイヒッ……ああっ……ハアッアアン……声が、声が自然と出ちゃいます……ンン……ハアッアアン……ひぎやああっああああ」

「い、痛いっ……そんな強く噛まないでっ……グボオオオオオオオオオ」

「ガヒッ、ガヒイヒイッ……お腹を……殴る……息が……息がっ……」

「キヤアアアアアアッ……そんな、そんな……まさか……」

「嘘でしたの……あれだけ……わたくしの胸を欲していたのは演技だとも……」

「ああっ……そんな……キヤアアアアッ……」

「ひ、卑怯ですわ……わたくしの……慈悲深い情けを……こんな形で返すなんて……」

「ヒ、ヒイヒイヒッ……わ、わたくしを、どうするつもりですか……知つてのとおり私は不死身……アギヒイヒイヒッ……イヤ……痛いのは……不死身とはいええ、痛みは……イヤアアアアアアアアッ」

「グベエエッ……ぼ、坊やが平気なのですか……わ、わたくしをすぐに治るとはいえ、こんな、こんなにも美しいわたくしを傷つけて……」

「やめ、やめなさい……ああっ、オッパイなんですよ、もつと、もつと優しく、そんなに強く握らないでええっ」

「い、いやらしいことしてただけじゃありませんか……そんな、わたくしを……こんなに傷つけて……ひぎいいいっ」

「え、アリの家族を殺したのはわたくしですって……」

「だから何だつていますの……そんな下賤の輩が何百、何千と、いえ何億人死のうが……わたくしを傷つけるのと等価のわけが……あぐうううっ」

「ハアハアハア……こんな、こんなことがあっていいはずがありません……キヤアアアアアアッ」

「やめ、やめてくださいまし……いくら治ると云つても、そう何度も何度も……グビヤアアッアアッ」

「ハアハアッ……坊や、憶えておきなさい……この恨みは必ず……」

「どんなに痛めつけても、殺されても……坊やの知つてのとおり、わたくしは不老不死……必ず蘇って……今度こそ……坊やも、その貧乳女も八つ裂きにしてさしあげますわ」

「……フフ、ええ、わかりましたわ、わたくしも覚悟を決めました。さあ、どんどんわたくしを痛めつけないさい、何なら幾度となく殺していただいても構いません。その代わり、何倍にも、何十倍にしてもお返しさせていただきますから……」

「えつ、ちよつ……キヤアッ……」

「わたくしを押し倒して、馬乗りになつて……そ、そう、な、殴るのでしょうか、いいですわ……さつき覚悟は決めましたもの……さあ、この美しい顔を殴るのなら……いくらでも……でも、坊や、わたくしは忘れませんわよ」

「ヒヤアアッアアアン……ど、どういふつもりですの……オマンコに指を挿れるなんて……」

「ま、まさか……」

「ひいひいひいひい……誰に、誰に聞いたのですか……」

「副官……あの女……作戦に失敗し、死ぬだけではなく……そんなことまで……」

「ち、違います……そんなセックスで、オマンコに精液を注ぎ込まれるだけで、本当に死ぬとか、そんなの非現実的ですよ」

「ひ、ひいひいひい、やめ、やめてっ……お願い……お願いですから……いやあああつあああつ……ダメ……わたくしの、未来永劫……生きつづけるわたくしが……そんな……不老が……不死が……いや、イヤです、イヤイヤアアアアアアアアアアアアアッ」

「イ、イヤ、イヤですわ……ヴォルザー……それだけは……も、勿体無いと思いませんの。手コキでイキましたよね、わたくしのオナニーでオチンチンを硬くしましたわよね、パイズリでもイったじゃないですか、わたくしのお尻でも、坊や自身が突き上げてきたじゃないですか。も、もっと愉しみましょ……そ、そうですわ坊やの肉奴隷にしてくださいな。好きな時にイカせて差し上げますから……」

「そ、そんな……締め付けは、そ、そうアナルの方がいいですわよ、オ、オマンコは、オマンコは絶対にダメです。坊やの……坊やの精液をオマンコに注ぎ込まれたら……」

「ひ、ひいいい、し、死にたくない……死にたくありません。ダメです。絶対にダメです。そ、そうだ恋人の前でわたくしを犯すなんて、そんな裏切るような行為、彼女が許すはず……」

「な、なにを……いいのですか、坊やがわたくしを犯すのですよ、それを許すというのですか」

「そ……そんなに……深くうなずいて……ま、まさか……いいと、わたくしを殺すためなら、殺しきるためならいいと貴方はおっしゃるのですか」

「い、イヤ……イヤッ……やめて……やめてください……イヤアッアアアッ……」

「ハアアン……そ、そう胸……オッパイならいくら揉んでも……いいですから」

「シンッ……ハアアン……き、気持ちいいでしょ……オッパイ、柔らかいですよね……ハアアン……オッパイ、ダメ、弱い、わたくし、オッパイ責められると……ハアッアアアン」

「イ、イヤ……開きません……絶対に股を開くものですか……そんな、そんなことをしたら……ハウン……ああ、クリはダメ……やめ……ハッアアアアアン……力が……力が……入りません……」

「いやっ……そんな強引に……やめ……『濡れてるぞ』って……そんなこれだけ……やって濡れない方が……ダメです……お願い……ヒイインッ……挿れないで……なんで何回もイったのに、そんなにすぐに大きく……ダメ、ダメです、挿れないでええええええ」

「んんぐっ……は、入った……やめ……シンアアアアアアッ……そんなに……いきなり……んああああ……ハアッアア……激しく……」

「ダメエエエエッ……シンッ……ハアンッ……やめ……そんなやめ……シンアアアアアアア」

「お願い……いやっ……ハアンッ……いやっ……でも……オマンコ……んひいいい……いいいい」

「お、お願い……もつと、ンアアアッ……もつと……シンッ……気持ちよく……させてあげますから……だから……中はやめて……ハアンッ……ください……どうか……ハアアッ……わたくしの……わたくしの胸に……顔に……どうか……ンアアアッアアッ」

「いやっ……死にたく……ないっ……やめ……ハアアアアンッ」

「シンアアアッ……ハアンッ……イヤ……イヤアアアアッ……」

「ハアアアツアツ……ンンツ……やめ、やめつ……イヤ、イヤ……イヤアアアアツアアアアツアアアアツアアアアツアアアアツ」

「イヤ、イヤイヤイヤイヤイヤアアアアアアアッ……死ぬのは、死ぬのは怖い
いいいっ……坊やっ、坊やっ、わたくしとイイことをしましょうっ……ねっ、て、手
ですかっ……口ですかっ……胸ですか……お尻ですかっ……いくらでも、いく
らでも気持ちよくしてあげますっ……ハアッアアアアアアアッ……」

「ダメとまらないっ……いけないのにつ……こんな胸を揉みしだいたら……こんな
オマンコを弄ったらイッちゃうのにつ……ダメッ……イクの、イってしまいますっ……
……ハアッアアアアアアアアアッ……」

「ああっ……坊や。そうです、はやく、はやく私のもとに。ああっ、やっとなか……
……ンアアアアアアアッ……くれたのですね。あとで……あとでいっぱいご奉仕いたし
ますからっ……まずは……まずはお尻に、わたくしのお尻に坊やのその勃起したオチ
ンチンをつ……はやく、はやくううううううっ」

「あっ……胸はダメ……そんなに揉まれたらっ……ンヒイイイイイイ」

「あっああっ……そこは、そこはお尻じゃっ……オ、オマンコはやめっ……そんなの
挿れられたらすぐにっ……すぐにイッちゃううううううううううっ」

「ハアアッアアアアアアアアアアアアアッ……ンヒイイイイイ、動かないでっ……腰を振らな
いでええええっ」

「死んじやうっ……死んでしまいますっ……やめっ、イかさないで……イったら、もう
一度イッたら逝ってしまうっ……ダメ、ダメ、ダメエエエエエツッ」

「ハアアッアアアアアアアアアアアアアッ……気持ちっ……んんひひひひひひ……死にたく、逝きた
くないひひひひひひ、イヤイヤイヤイヤイヤアアアアアアアアッ」

「坊やっ……やめっ……それ以上はもうっ……イク、イッちゃうっ……ダメ、ダメです
っ……イヤ、イヤッ……でも、でもっ……もう……坊やっ……やめてっ……お願いっ……
……動かないでええええっ」

「も、もうっ……いや、死にたく……ンヒイイイイ、もうダメ、イヤ……イヤ……ン
ヒイイイイイイッ……イク、イッちゃう、坊やっ……坊やああっあああっ……」

「ハアアッアアアアアアアアアアアアアッ……ダメダメダメダメダメッ、イクの、ダメエツエエエ
エ。イヤイヤイヤイヤアアアアアアアッ……イク逝く、イク逝く……イヒイイイイイ
イイイイイイイイイッ」

「あっ……あっ……あっ……ああっ……」

9.

サークル挨拶音声

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して

椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラックスした状態でお聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり、物にぶつかるなどして

怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず

スピーカーから大音量で本作品を再生した場合

あなたの人生に深刻な問題を発生させる恐れがありますので

くれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

10.

体験版ダウンロードの案内音声

「この度は体験版をダウンロードいただきありがとうございました」

「体験版をご試聴いただき、気に入っていただきましたら

製品版をご購入いただけるととてもうれしいです」

「今後ともサークル、ケチャップ味のマヨネーズをよろしくお願いいたします」